

研究資料

ルソー—アンリエット書簡（上）

桑 瀬 章二郎

現代社会学部・社会システム学科

以下に訳出するのは、アンリエットという名の女性読者が、1764年3月から1765年12月の間にルソーに宛てた五通の手紙と、ルソーの二通の返事、それに1770年、パリに戻ったルソーにアンリエットが面会を求めたのに対し、受け取ったとされる彼からの返事である。翻訳は、*Correspondance complète de Jean-Jacques Rousseau*. éd. critique et annotée par R. A. Leigh, Oxford, The Voltaire foundation, 1965-1998による。便宜上、原典にはない番号を書簡の最初に付し、（ ）内に、『書簡全集』における書簡番号を示した。

書簡の前半部を本号に掲載し、後半部は次号に発表を予定している。

1 (3192)

アンリエットよりルソーへ

1764年3月26日

いまだ拝顔の榮に浴してもございませぬのに、このようにお便りを差し上げますことをご不審に思われるかもしれません。書き出しの部分ですでに、お便りを差し上げる理由をお察しになって、滑稽とお感じにさえなることでしょう。ですが、どうしてそれを恐れることがありましょう。あなた様は人の心というものにまことに精通していらっしゃるから、どのような感情ゆえに心乱れておりますかもすべてご存じのはずです。わたくしはどなたかに心中を洗いざらい打ち明けねばなりません、打ち明けたとしてもそれが有意義なものとなるのは、あなた様に対してでしかありません。こんな風に信頼申し上げることができるのは、あなた様だけだと感じるのです。自分の好みに合った、自分にふさわしい、そして蒙を啓き、納得させてくださるような考え方をされるのは、あなた様だけだからこそ、ご覧の通り信頼申し上げているのです。あなた様の主義主張はどなたよりも正しく、どなたよりも明快で強固に思われますし、どなたと比べましても自然や経験、理性と一番よく調和しているように思われます。なにもあなた様

にお追従を申し上げようとしているわけではありません。決してそのような大それた気持ちを持ち合わせているわけではなく、[あなた様にお便りを差し上げるという]この軽はずみな行いをお許しいただきたいからこそ、このように申し上げるのです。そしてこんな軽率な振舞いも、幸せになりたいという強い気持ちがあったからこそ頭に浮かんだものなものでした。わたくしはあなた様のエミールについてのご高著『エミール』のある箇所を読んで、幸福についてこれまでわたくしが抱いておりました考えを打ち砕かれ、現在のような迷いの状態へと落ちてしまいました。このこともまた、どうしてもあなた様のお導きのことばを頂きたいと思う所以なのです。あなた様のお考えをさまざまな状況に当てはめようとした場合、解釈の幅を広げたり狭めたりしなければならないでしょうが、それをあなた様ご自身より上手にできる方などおりましたら。

恐れながら、その箇所はどこかと申し上げますと、女学者を問題にされている箇所なのです。その点についてあなた様がおっしゃることはごもっともで、まったく真実でございますので、わたくしは悲嘆に暮れました。ただご安心いただきたいのですが、わたくしはこうした女学者ではありません。わたくしは何事も正確には知りませんし、なおのこと知識があるようにみられようとは思いません。わたくしはただ、学者であるという評判をもたらずような活動に専心する計画をたてただけなのです。ですが、その計画も、自分の幸福について考えるなかで見つけた確かな根拠があってこそたてたわけですので、わたくしは今でもその計画にかなり執着しており、いかなることにも例外があるように、この問題にも一般的な物差しから外れる場合があるのではないかと、そしてあなた様のお考えではわたくしはその例外になりますまいか、お尋ねさせていただくことなしには、それを断念することができないのです。一般人に当てはめた時にはおかしいと思われることでも、わたくしにとっては道理にかなった、そして必要なものにさえなりうるかもしれません。これこそが、あなた様にご検討いただきたいことなのです。

ご検討を容易にするためには、そしてわたくしにふさわしいものは何かをご判断いただくには、これまでにわたく

しが置かれた様々な状況と生来の性格をお伝えしながら、自分がどのような人間かを申し上げねばなりません。あれこれご説明申し上げるよりも、手短かかつ率直に自分のこととお話したほうが、わたくしのことをよりよくおわかりいただけるでしょう。自尊心が傷つくかもしれないことがらでも、隠してはいたしません。あなた様という、人の心の動きをよくご存知で、寛大な対処をしていただける哲学者に向かってお話するわけですから。そもそも、自分にとって有益で適切な、自分の性格に合ったお導きのことば、ひとことでいうならわたくしのためのご助言をいただきたいと思うわけですから、真実をお伝えるのは不可欠なのです。そのお導きのことばによってわたくしは本当の幸福感を感じることはないにしても、少なくとも今よりは不幸せでなくなることができるでしょう。

わたくしは、もうあまり若くもありませんし、あまり美しいともいえない未婚の女性です。さらにわたくしにはこれといった財産がないのです。つまり中流の女性よりもはるかに劣った存在なのです。ただし父はかなりの財産を持っておりましたので、一生安楽に暮らせるはずの若者でしたら普通に受けさせてもらっているような教育を、わたくしも受けました。しかしながら、財産があるほうが有利だと感じ始める年頃に達するやいなや、突然その財産を失ってしまったのです。不運に苦痛と悲哀は付き物ですが、わたくしの場合にもこの悲劇の後、数々の苦しみと哀しみを経験することになりました。せつかく物心がつく年齢になっても、どうすれば不幸に耐えられるかを学ぶようになったただけだったのです。そして不幸から身を守るために卑しい手段に頼るのは自尊心がゆるしませんでしたから、わたくしは今日まで絶えず哀しみの中でもがいてきましたが、生来の感じやすさがこの哀しみを倍加させたのでした。ただ、財産はないとはいえ、「礼儀正しき一同」と呼ばれるような方々と常にお付き合いしながら暮らしてまいりました。しかしそれでかえって、生活のゆとりと教育から生まれた趣味は残ってしまい、むしろ強まる一方で、その結果、自分に欠けているものをより強く感じてしまうようになったのです。社交界とはいずれも本質では似ていながら、愚かしい点ではそれぞれ異なっているものですが、わたくしもそんないくつかの社交界で、こんな風に十五、六年の年月を過ごしてまいりました。いずれの社会でも、逆境にいるということは決して完全には許してもらえない過ちのようであって、人に払ってもらえる敬意は常にどれだけの富を有しているかにかかっているということ、そして[こうした考え方は]社会全体を覆う病となって良識ある人たちの

あいだにも広がっていることを、わたくしはすぐに理解いたしました。そして、人の心の中にあるものが如何なるものかが、かなりよくわかりましたので、自分の心は決して満たされることがないと絶望することになったのです。わたくしの心はいっぱいなので、その心を開いて打ち明け、慰めを見つめる必要がありました。けれどもこの苦痛を和らげてくれるような、完全な信頼感を抱くことができる方は誰一人としておりませんでした。わたくしの境遇に大きな変化が起こった後、さまざまな理由から、信仰深い方たちと田舎に行って暮らそうと決心しましたが、わたくしはその方たちを見かけほど極端な信心家とは思っておりませんでした。[そして]わたくしの考え方はその方たちとあまりにかけ離れていたもので、思い切って自分の考えを表明することができなかつたのです。それで、完全に自分の中に閉じこもらざるをえず、さらにいかなる気晴らしもなく――と言いますのも、この社会ではあらゆる娯楽が禁じられ、人を楽しませる術を知っている人は誰であれ出入りが禁止になりましたから――、わたくしはとても憂鬱になりました。心はまるで死んだようで、精神は打ちのめされ、魂は気むずかしくなり、その結果健康がひどく損なわれてしまいました。四年以上もずっと病気の状態で、いかなる治療を試してもいっこうに治らなかつたのです。そして何度も繰り返し苦しみ思い悩んだ末、ついにこう考えるようになったのです。自分の境遇は変えることができないのだから、それを乗り越えその厳しさを和らげるには自分の境遇に対し今ほど過敏にならないという方法しかない、そしてそのためには、かなりの注意力を要する抽象的なことから熱心に研究することで、注意力を安定させるか、あるいはせめてそうすることで、わたくしが沈んでいるこの暗く絶望的な考えから注意をそらすしかない、こう考えたのでした。実際に勉強を始めてみますと、援助してくれる人など誰もおりませんでしたので最初はとても大変でしたが、次第に興味を持てるようになり、そしてしまいには、普通の女性には欠けているものもこれによって手に入るのです。おそらくのちのち他の方たちと同じレベルに立つための手段になるだろうと思うようになりました。こう考えると愉快になり、勇気づけられ、わたくしは発熱に震えても薬を飲みながら、ラテン語や、論理学、形而上学で頭をいっぱいにしたのでした。

自分の不幸な境遇を思うと、結婚のことを考えることなどできませんでしたし、そこから目をそらす必要さえありました。わたくしはそれなりの容姿をしておりましたが、お金がすべてというこのご時世ですから、それが自分の有

利になるなどと信じるほどには期待をしておりませんでした。[ですが] このことに関しては態度を決めなければならない、そう理解するのは苦しいことでした。わたくしは結婚や、自ら愛した自分を愛してくれる夫、愛するであろう子供たち、管理すべき家庭、自分が与えるべき指示といった考え、つまり家庭とはそうしたわたくしだけの平和な王国のようなものだという考えに慣れ親しんで育っていたのです。これらすべてについて、わたくしは、そのよい面からしかみることできませんでしたが、そのいずれもが、幸福、満足、喜びを約束しているようにみえたのです。こうしたごくわずかのことだけを考えて十八歳になったのですが、財産は消えてしまったのにこうした考えだけは消え去りませんでした。その頃にはこうした考えを消し去ることはもはや容易ではなく、諦めてしまうことの苦しみはあまりに大きかったのです。生来の性向を押し殺さなければならぬだけでなく、自尊心が揺らいでしまったのをなんとかなだめてやる必要がありました。忘れられてしまい、今なお待ち望んでいるのに誰にも探し求めに来てもらえないような女性に見られることほど惨めなことはないと考えておりました。そして、こう考えることによって、自分の決意を固めるさらなる理由があると判断したのです。このように熱心に「研究に向かって」生きることによって、そして特に哲学的な調子を付け加えることによって、やむなくこうしているのに、あたかも自分から望んでしているようにみせ、自分が恐れている屈辱を未然に防ぐことができるのではと思えたのです。しかし、そのことを信じてもらうには、さらにそれを言葉よりも性格や振舞いによって示す必要があるとも感じました。ですから、自分の思考を、才氣に富んだ殿方のお持ちのはずの思考にできる限り似せ、そうした方の好み、時間の過ごし方、考え方、社交界での振舞を身につけよう、そして女性のあらゆる不幸から解放され、なにより、いかにも人に取り入ろうとしているような態度を捨て去ろうと決心をしたのです。

本当に信じてもらえたかどうかはわかりませんが、男性の思考を身につけても女としての心根はやはり残っており、自分の心を「男性であろうという」定めに従わせようとしても、逆らおうとすることがよくありました。人の性として授けられ、教育によって強固になったそんなわたくしの性向は、わたくしの存在そのものだったのです。その性向を失うことは、死ぬことを意味しました。しかしわたくしはそれを消し去らなければならないと感じておりましたし、また無為で死んだようなわたくしのこの心は、わたくしに備わっているはずの誇りをそのまま全部必要としておりま

した。[つまり] この誇りだけが自分に打ち勝つ勇気を与えてくれ、自分にとってかくも大切だった馴染み深い考えを他の考えに置き換えようという気にさせ、かつて知っていたのとは異なる利益を探し求めたり、異なる趣味を持ち、欲望を抱き、これまでと違う対象のなかに幸福を見ようしむけることができたのです。要するに、自分を作りなおし、新たな存在、せめて本当の自分が屈辱を味わわなくてもすむように取り繕われた存在になるようしむけることができたのです。この目標に到達するのに研究は大いに助けになるだろうと、わたくしの眼には映りました。研究のおかげでいくつもの目的をはたせたのです。自尊心が傷つけられないよう配慮できましたし、また精神を刺激することによって、心を煙に巻く手段を見いだしたのです。

二、三年のあいだ、夢中で研究にとりくんだのですが、[成果といえば] いくらかの知識に触れ、それらを好むようになったことぐらいでした。ほとんど絶え間なく頻繁に起こる病が研究を困難にしたのです。そして、さまざまな出来事があり、不幸が途切れることなく続き、交際する人びとも何度か変わり、激しい変化で生活が混乱し、心は厳しい試練にさらされ、こうしたすべてのことが原因となって、自分のたてた計画を続けることができなくなったのです。計画を見失ったのはもうはるか昔のことですが、この計画には愛着と、それを再び実行したいという願いを持ちつづけておりました。結局、幸福になりたい、心の安らぎを手に入れたいという欲求だけが、わたくしをこの計画に立ち戻らせたのです。わたくしの当初の動機に自惚れと虚栄心があったことは申し上げた通りですが、今はもうまったく残っておりません。わたくしはただ、心がもっと穏やかで甘美な状態になることだけを求めているのです。この動機は、自然で正当であると思われるので、はたしてわたくしは正しい道を進んでいるのか、それとも道に迷ってしまったのかご指摘をたまわりたく、より自信を持ってお願い申し上げる次第です。

ただしこうした混乱の年月は、いかに辛かったとはいえ、まったく無駄だったわけではありません。と申しますのも、わたくしは自分を知るということを学んだわけですから。さまざまな状況に置かれ、過ちをいくつも犯したために、わたくしは自分自身がはっきりとわかるようになりました。そして、およそこんな風に自分の肖像を描いてみるのです。わたくしについてご判断いただくのに、これも無意味ではございません。

わたくしは強く澁刺とした気性ですが、同時に優しくおらかなで、気さくです。楽しむことが好きで、素直で飾る

ところがありません。自尊心は強く、感受性は研ぎ澄まされ、想像力は旺盛過ぎるほどで、情にもろすぎるくらいあります。誇り高き魂の持ち主で、意志は強く、決断力もあるのですが、臆病なため、自分がまったく尊敬していない人たちにさえ惑わされてしまいます。他人から尊敬され、評価されたいと思うのですが、富を誇示することによってしか得られないような名声には関心がなく、財産があればとは思いますが、それは自分がより自立し、自分を生かし、その価値を十分に発揮する助けとなる限りにおいてしか重要ではありません。いつでも自分を捧げ、心動かされるものためには金銭的な利益を犠牲にする用意があり、傷ついたときは冷ややかでそっけなく、友情にはすべてを捧げるのですが、権威や脅しによって譲歩することはなく、対立があるといただち、不幸には立ち向かおうとします。なにかと失敗も多いですが、自分の過ちはあっさりと認めます。衝動が起こったときはいつも抑えるのが困難です。平凡な趣味は持ち合わせておらず、何においても凡庸なものは好きになれず、心や精神を動かさないものすべてに退屈するので、実際退屈していることが多いのです。何にもこだわりが持てないというのも耐えられませんが、[また逆に] わたくしにこだわってくれるものがないというのも耐えられません。いつも友情を探し求めています、それがほとんど幻想でしかないとわかるとひどく落ち込みます。

自分の行動やこれまでの人生で行ってきたあらゆることからについて考えてみますと、自分はこんな人間だと思えます。そしてさらに、わたくしの性格は常に同じであって、変化することがなかったと思われまふ。わたくしの考え方は、ものの見方が進化し成長することによってもたらされる変化以外のものは経験することがなかったのです。この進化や経験によって、意見は変化いたしました、性向や趣味についてはなにも変わりませんでした。今日では、自分が誇りとするもの、そして自尊心が求めようとするものは以前とは異なっております。わたくしは以前ほど偏見や世論に流されないようになりましたが、尊敬するかたがたのお考えにはいっそうの愛着を覚えるようになりました。結婚できなくて残念だとも思わなくなりました。この時代の風俗を知ると、結婚にあるはずだと思っていた幸福を実際にはそこに見出すことができないとわかったからです。自尊心を満たすだけでよかったならこれほど苦しみは強くなかったでしょうが、わたくしはいつも、うわべだけの幸福よりも心の幸福を求めてきたのでした。

わたくしの性格の持つ、変わることはない性質についてこのように観察してみますと、性格を変えることがいかに

困難で、不可能でさえあるか、ご理解いただけるに相違ありません。あなた様も、そんなことはお勧めにならないと存じます。わたくしの努力も無駄に終わるでしょうし、今よりもっと不幸になるだけだと思われるからです。あなた様がおっしゃるように、性格は気質に、気質は心に、そしてそうしたことは全部、自分では決めることができない体質によって決まるものと思われるのです。

わたくしの魂が通常おかれている状態について、さらに詳しくお話をすることをお許しくくださいますようお願い申し上げます。わたくしのこの魂には、人生を織り成すあらゆる悲しみによって、苦しみがかくも深く刻み付けられたので、あたかも苦しみが染みついてしまったかのようです。もう久しいことわたくしは、生きていることに満足であれば得られるはずの、あの甘美なやすらぎの中で目覚めるといふ幸福を味わったことはありませんし、これから穏やかな心地よい一日が始まろうとしているのだと思えたことはありません。目覚めのときは、この世で一番ぞっとする瞬間です。激しく胸が締めつけられる感覚で眠りから引き離され、鋭い苦しみが射し込んでまだまどろんでいる感覚が破られ、最後に恐れと怯えがそれに続きます。これほど辛い感情によって日々の生活に連れ戻されたわたくしは、森羅万象の中でまったく一人きりであると感じ、そうすると漠とした無数の哀しい考えが厚い雲のように浮かんで集まり、わたくしを包み込んでしまいます。その雲を払いのけようともがき、あたりを見まわして、あらゆるものを注意深く見るのですが、自分を慰めるものなどなにひとつ見当たらないのです。さらに理性を呼び求め、それを見出し、その声を聞いてみるのですが、心に訴えてくるものはなにひとつありません。この長く惨めな今世をずっと眠りに沈んで過ごすことができないのは殊に恨めしく、それで苦しみもいや増すのです。日々このように鬱屈した気持ちで一日が始まるのですから、それをできるだけ平穏な気持ちで終えるためには、いったいどれほどの努力が必要でしょうか。

自分のため、もしくは人のために、たまたましなければならぬことができ、それが没頭できるほど興味ぶかいものでもない限り、毎日のようにわたくしはこんな風に感じております。しかしそのような機会に恵まれるのは滅多にないことすし、機会が得られるかどうかはわたくしの力で決まるといふよりも、むしろわたくしがそれに興味を持てるかどうかということの方が大きいのです。と申しますのもご承知の通り、心にはなにひとつ指図することができないからです。心というものは自分が望むものにしか興

味を示しませんし、気に入った扱いを受けられないと、そして、何のために働いているのかがわからないと、またどこに拠り所を見つければよいかわからないと、言ってみれば、ずっと「動き回って」息もたえだえという状態である限り、常に不幸せなままなのですから。

ですから自分にできる最善の策は、この上なく注意力を惹きつけてくれるような対象に精神を集中させ、そうやって心を眠らせようと努めることなのです。「こうして呼び起こされた」関心は初めは弱いものかもしれませんが、習慣となるにつれて好奇心が目をさまし、虚栄心もまじることによって時とともに情熱が生まれ、効果があらわれてくることでしょう。それでも少しでも安らぎが手に入るのなら、愚かなこととわかっていても、身に余る幸せではないでしょうか。

暇をつぶしたい、退屈が嫌だというのなら、普通に女がする針仕事で十分だとおっしゃられるかもしれませんが。しかし、わたくしが解消したいと思うのは退屈さよりも心の漠たる不快感のほうですし、指先しか使わないこうした仕事は、誰かと一緒にいるときに話をしなくてよいという理由でもないかぎり好きになれないのです。ひとりしていると、こちら側へむこう側へと針を動かしてみても無駄で、ただ機械的に手を動かしているだけで、集中しようと思っても役に立たないのです。むしろそうしたときにこそ、想像力は働きはじめ、好き勝手にさまよい、哀しい心が生み出す数知れぬ想念をかき集め、あらゆる艱難辛苦を画き直してはこの上なく陰鬱な妄想を見せつけ、生まれてこの方あらゆる局面で味わった苦しみを呼び覚ますのです。心は息苦しいほどに締付けられ今や引き裂けんばかり、これでは弱り果ててしまうか、あるいはやるせない悔しさに魂全体を侵されて、生きるのが忌まわしくなってしまう。

心がもっと幸せな状態であれば、刺繍や織物も気晴らしになるのでしょうか、今のわたくしがおかれた状態では、こうしたことは仕事のうちに入りません。そもそもどれだけ針仕事が気に入るかは、自分がどれだけ興味を持てるかにかかっているものです。わたくしがいかなような興味を持てるというのでしょうか。夫ある妻、一家の母たるもの、女の仕事に取りかかれば快い考えがいくらか湧いてきて自分を支えてくれるでしょうし、そうなれば他に仕事が必要だなどと感じる隙すらないでしょう。彼女らには旦那様がおりますので、世話をしてあげることで認めてもらい、やさしくしてもらいたいと思えるのです。また男の子がいれば、つまり目の中に入れても痛くないような我が子がいれば、そのために何かしているときはいつでも、その子

のことを考えていたいと思うものです。そのような女性たちのようにわたくしにも、この人のためにこそ手仕事をしていると思えるような、そして自分にとって大切であるような人がいるでしょうか？わたくしも彼女たちのように、針仕事をしている最中から、作業が終わる瞬間のことに思いを馳せ、縫い終えたものを贈る喜び、愛しい人がそれを受け取りながら感じてくれる喜びを、前もってしかと我が身に感じるのでしょうか。その愛する人に縫い終えたものを手ずから着せ、その人がまたひとつわたくしの愛情の証^{しるし}が手に入っていくにも満ち足りた顔を、わたくしの情愛は全部自分のもの、わたくしが考えることも全部自分のことだと知って愉悦に浸っている、そういう様子をまなごしの奥に読みとり、自分が愛されていると確信してそれを正真正銘唯一の幸福だと考えたりできるでしょうか？

これが、自然がわたくしたち女性に用意した快樂なのです。しかしわたくし向きの快樂ではありません。わたくしの場合、かくも甘美な関心を抱くことなどできないのですから、手が針を運ぶ間、いったい何がわたくしの精神をひきつけるというのでしょうか。わたくしの魂は、放っておかれても大丈夫なほど、安穩とした状態にはありません。わたくしは、どうしても自分自身から遠ざかり、遠く離れたところで、心引き裂く困惑と内なる苦痛の感情とを消し去る必要があるのです。ですから、気を紛らわさなければならぬのではないのでしょうか。わたくしの置かれた状況によって実行できなくなった務めの変わりに、自分がしなければならないことなどなにもないということを感じなくてすむほどに激しい何かを見つけなければならないのではないのでしょうか。よく考えて内容を選べば、研究によって好奇心をかきたて、それに注意を集中し、夢中になってそのことばかりを考え、心に少しずつ落ち着きを取り戻すことができるでしょう。

研究というこの活動は、確かに自然の秩序に反するものですし、ふさわしくないものです。しかし、わたくし自身もこの秩序に属していないようなものですし、さらにこうなったのはわたくしの責任ではないのです。わたくしがこの秩序から抜け出ようとしたわけではありません。生来の好みや性格から言えばむしろ、そこにとどまっていたはずなのです。この時代の慣習や偏見の当然の帰結としてそこから締め出されることになったのですから、どうして、望まれてもいないのにあくまでそこにとどまろうとして、自分からさらに不幸な境遇になろうとするのでしょうか。社会はわたくしを社会にとってまったく無意味なものとし、何

ものとも調和せず、折り合いの付かない除け者のようなものにしたのに、どうしてあえて自分のほうから何かに自分をあわせようとするのでしょうか。わたくしのほうも、自分に対し社会を、そして少なくともわたくしについて社会がくだす判断を、無意味なものとするべきではないでしょうか。社会はわたくしの幸福とは何の関係もないというのに、どうして自分から、世論の奴隷となるのでしょうか。孤立してしまったわたくしは男女どちらの性にも属さず、ただ物事を考え悩み苦しむだけの存在でしかなく、わたくしにいかなる場所も与えてくれなかった社会の周縁にとどまるのです。それはちょうど一個の石材が使いものにならず、建物の一部になることもできないままその傍らに放っておかれているようなものです。それは隅石でもなければ礎石でもなく、何の役にもたななかったもので、路行く人の邪魔にならないように片付けられただけの石なのです。石ならまだしもわたくしはそれに加えて感情を有するわけですから、路行く人にぶつからないよう自分自身で脇へよけ、自分とはなにひとつ共有するものなくなったこの集団にとって最適な場所ではなく、自分にとって一番都合の悪くない場所を選ぶのです。要するに、人様の役には立てず、自身のためだけにしか存在する必要がないわけですから、わたくしは自分だけ、自分の好みだけ、わたくし個人の幸福だけに耳を傾けるべきだと思われるのです。

ところで、わたくし個人が幸福であるためには、何かに没頭できなければなりません。ほかの人にとって無意味に生きていることには嫌気がさすほどで、また誰の迷惑にもなっておらず、誰に対しても、そしてどんな立場の人に対しても特に義務はなく、果たすべき特別な務めもなく、誰のためであれ他人の幸福を気遣うことなどないのですから、いったい誰がわたくしの行動を動機づけ、わたくしの行動に関心や生気を与えてくれるのでしょうか。確かな目的も持たず、どこに向かうのかもわからず、嫌悪感、倦怠感に包まれ、日々が無意味に過ぎていくのだというぞっとするような気持ちのなかで、わたくしは先に進んでいるのです。気に入ることなどなにもなく、心動かされることもなにひとつなく、わたくしのまわりではすべてが滅び、そしてわたくし自身もまさに死へと向かおうとしているのです。

生きるためには行動しなければなりません、なんらかの興味を持って行動する必要があります。わたくしは幾度となく信仰に興味を持ちたいと思いました。万物に神を見、神に対して友人のように接し、神が一番目をかけてくださっているのは自分だと信じ切っているような熱烈な信心家

になるためなら、この世にあるもの全てでも差し出したでしょう。ですが、わたくしは、まったくもって心から、理屈の上でも気持ちの上でも納得ずくで、そうなりたと思ったのでした。そして、こうすればそんな情熱が生まれるかもと思われた手段は全部試してみたのですが、不幸にも信仰からいっそう遠ざかることにしかならなかったのです。

以来、偽りだけの世界に嫌気がさし、自分の厳しい経済状態に苦しみながら、それを改善しようと意味もなく奔走しては疲れはて、見込みのない期待ばかりしてうんざりし、不誠実と心の弱さしか見出すことのできなかつた友人から離れてしまったわたくしは、都会から遠くはなれたどこかの田舎に引きこもり、そこでひとり、素朴で質素な地元の人びとと一緒に暮らす決心をしたのです。逆境のせいであらゆる可能性を奪われ、生きていても趣味や願望のことで絶えず苦しみ悶えているだけですのに、そんな社会でいかなる快楽、幸福を期待することができるのでしょうか、そう考えたのでした。田舎では逆に、わたくしの心も持ち前の好みをせめていくつかは満足させてもらって、生氣のようなものを手に入れることができるでしょう。心は開かれ、広がり、のたうちまわるような永劫の苦しみから解放される、そんなことだってありうるでしょう。もっとしっかり儉約することによって、幸福への道が開かれるでしょう。そうすれば不幸な人びとの苦しみをやわらげ、涙をぬぐってあげ、悲嘆にくれる家庭に喜びをもたらしてあげることもできるでしょう。この上なく真実で、真に胸うつ快楽を味わうでしょうし、自分の存在が他の人びとに有益になり始めるやいなや、自分にとっても煩わしいものではなくなるでしょう。

こうした甘やかな幻想に酔いしれていたとき、たまたまある方々と知り合いになりました。その方たちはかつて折りがあった、田舎に暮らす人たちの習俗や特質をお知りになったというのです。自分が手に入れるつもりだった幸福に本当に深く関わるような質問は、とにかく何でも聞いていただきました。ところがその方々が教えてくださったのは、どれもこれもわたくしを悲しませることばかりだったのです。その方々が描く不誠実で、忘恩で、悪意に満ちた田舎者の様子に、わたくしは一度に確信が揺らぎました。わたくしはそうした言葉すべてをととは言わないまでもそれなりに信じてしまい、悲しい経験をするのではないかと、人に知られてしまったという理由だけでその計画を進めなければならないなくなったとしたら後から後悔することになるのではないかと恐れ、結局思いとどまってこの計画を断念し、再び勉強の計画に手を着けたのです。やはりわたくしが立

ち戻るの、いつだってそこしかございませんでした。

日々、この計画には、優れた点が新しく見つかります。このお手紙もはや冗長なものとなりましたが、この計画の将来の利点についてお話することをお許しいただけますでしょうか。その利点とは、それ自体としてはあまりにも惨めな老後の日々を魅力あるものにしてくれるだろうという点でございます。不幸にも、わたくしには他の人びとの幸福に貢献する手段がなく、この自分の代わりに、快適で心地のよい邸や、娯楽や気晴らしを提供して人々を集め、彼らが自分たちで楽しめるようにする手段もありませんから、老後の日々はいっそう哀しいものとなるでしょう。こうした自分自身を補ってあげることがが欠如していることの埋め合わせとして、知性を磨くことによって得られるものがあるのではと思われるのです。それはわたくしの手を離れることがなく、せめてわたくしがより長いあいだわたくし自身でいれるようにしてくれるもの、言いかえれば、わたくしが自分で自分の埋め合わせをできるようにしてくれるものはずです。自分の思考にさらなる広がりを持たせることによって、そして精神を鍛えることによって、自己はより力強くなり、より長い間活力を保てるようになります。無為と悲しみに身をまかせていると、同じことを繰り返し、不平を言うことしかできなくなるでしょうが、[このように精神を鍛えることによって]まだしっかりとものと考え、ときにはまわりを陽気にできるのです。わたくしの人生最良の年月は過ぎ去りました。これからの年月は、今はまだ遠くにある最後のときに近づいていくだけです。そして未婚の老女になってしまうことを考えて身震いするのです。そういう女性の衰えは、年月のなせる業であると同時に悲しみの産物でもあるのです。老いさらばえたその存在はどう見てもおぞましい姿を晒しているだけで、人はその姿を思い出す度にすぐさま払いのけようとするでしょう。ああ、老年という人生の冬は、女性にとってなんとおぞましい冬でしょう！それを予期し備えるのに、そしてそのために手段を講ずるのに、早すぎるなどということがあるでしょうか。この哀しく暗鬱な時期は、もはや友人を作る時期ではありません。友人はそれにはるか先立つ時期に作っておかなければなりません。その友人を失わないでいれるのなら、そして長続きするような友人を選ぶことができたならそれだけで過ぎた幸せです。ところが、女性、同性の中でこうした友人を作ることはまず不可能なのです。女性が同性とつきあって何の得をすることがあるでしょう。体が衰えてくる年齢に至ると、女性は皆出不精になり、家にこもるようになります。最も裕福な女性たちは、自分た

ちの家に、富裕でない女性たち、あるいは彼女たちほど裕福でない女性たちを呼ぼうとします。しかしながら、体が不自由だったり弱かったりすれば移動も困難ですし、あなた様のご指摘になられたように、裕福な女性とそうではない未婚の女性とが親しくなったとしても、どのような関係になるかはたいてい決まっております。裕福でない方が気を遣ったり不愉快な思いをしたりするばかりで、自分ではそんな風に見えるとは思っていなくても、その友人の意志に隷属してしまうのです。裕福な友人はずっと高い位置を、こびる女性がずっと低い位置を占めるようになるわけです。

したがって、人類のもう半分、つまり、男の方たちとの間にこうした交際を求めなければなりません。そうした男の方たちを見つけるには、もっと若いころに、自分のことをしっかりと心に留めていただき、実際の美質を示すことでその尊敬と友情を得て、そしてまた視覚に対してもそうですがよりいっそう精神に対してよい印象を与えていなければなりません。容姿で気を引けなくなっても、我々の精神の中に日頃から普通に認めてもらえるような能力があれば、若さや美しさが失われてしまったことを大目に見てもらえるのです。しかし、彼らの精神を楽ませるためには、どうしてもよいことがらではなく、なにか話すべきことがらを持っていなければなりません。なぜなら、確固たる関係を築くことができるような男の方は、他の方とは異なっているでしょうから。あなた様はわたくしよりもよくご存知でいらっしゃるかもしれませんが、そうした男性は、社会をまるごと見渡してもほとんど見つかりません。それに、もしそうした方に会えましたとしても、残念ながらわたくしは、通常殿方の心をもっとも魅了し、惹きつけるような魅力を持ち合わせておりませんし、さらに残念なことに、その方の好奇心を引き起こし、さらにそれをかきたてるようなお話もなにひとつできないのですから、どうしてその方に気付いていただけるのでしょうか。虚栄心をくすぐられないような人のことは、最初からほとんど知りたいとは思わないものです。こう申し上げるのは、上記のような思慮深い男性もまた、おそらくその方なりに虚栄心を持っているはずだからです。このような男性と他の男性との間にある違いといえば、あなた様もよくご存知でしょうが、その方にとって虚栄心はそれなりのものでしかないのに対し、他の男性は虚栄にまみれているという点くらいなものなのです。ですからまず、わたくしはここでもまた乗り越えなければならぬ障害がある、ということになるのです。それに成功するために最もふさわしい方法は、わたくしが十分慎重な態度をとり、わたくしの持つ能力がその方の誇りを埋

め合わせられるほどのものだというのに、気付かれる心配すらしないでいられるようにすることだと思われま。才気をお持ちで博識でいらっしゃるこの方は、愚か者や粗忽者の中では沈黙を余儀なくされることも多いでしょうが、だからこそ自分の言うことを理解できる耳をもった人物に出会ったときには満足してくれるかもしれません。わたくしのものの見方が広く、正確であり、自分の話すことについて正しく判断をくださるための見識と能力も備えているのだと認めてくだされば、その分いっそうわたくしとの会話も興味深いと思ってくださいませ。わたくしが賛意を示すのもお気に召すことでしょう。人は、自分を満足させてくれるものに立ち戻るものですから、その方もさらにそれを得ようとし、少しずつ習慣が芽生え、ふたりの関係は強固になっていくでしょう。

向こう八年から十年の間に、一緒にいても気兼ねなくしてよいほど気の合うひと何人かに会うことができたらいのにと思ひます。そうしましたら、わたくしは身の程にあった小さな集まりを開くのですが、そういう方たちがいてくれれば、ゆっくりと安らかに年をとるようになるでしょうし、そしておそらくは、思い出さえ失ってしまいたいと思える時期よりは明るい気持ちで老いてゆくようになるでしょう。

勉強をすればこうした状態に至ることができると申し上げているわけですが、そんなときもわたくしは、ひっきりなしに話をし、ぱっさりと言ひ捨て、ものごとを決めつけようとする女学者のように振舞おうと思ひているのではありません。浅薄なものであれ、本物であれ、知識をひけらかすことはつねに愚かなことです。さらに人というものは、他人に何の話を聞かされても、自分が述べたことに関心を払ってもらふほどにはよい気分にはならないものです。他人の話は気晴らしに過ぎませんが、注意を払ってもらふのは快感なのです。わたくしが知識を得たいと申しますのは、ただ話をよく理解し、みなさんの会話の中でより役に立つことができるようになりたいと思ふからなのです。それに、わたくしは人様になにひとつ要求をするつもりはございませぬので、とがめられて気詰まりになる恐れも全くないでしょうし、気軽につきあえるおおらかな性格の女にいつでも機嫌よく迎えてもらえと安心され、わたくしのところにおいでになるもならないも完全にみなさまの自由、ご本人様のお心次第となるでしょう。トランプするしか能がないような、あるいは空っぽで退屈な言葉を聞かされたりしなければならぬような、ごくありふれた一座と一緒にいるよりは、自由にくつろぐことができるわたくしの隠遁場

所のほうを好んでくれることも、ままあるやもしれませぬ。

今わたくしがたてております計画は、以上のような点で先々のためになると思ひます。この利点を引き立たせる理由をなにからななまで持ち出して、その根拠づけをしようと願ふあまり、あまりにも長々とつまらない点についてお話しすることになり、あなた様のご好意に甘えすぎてしまったかもしれません。しかしながら、これだけははっきりと申し上げることができませぬ。わたくしはできる限りかいつまんで短いお話にまとめようと思ひましたし、このお手紙がすっかり長くなってしまったとはいえ、わたくしが考へていることのごく一部しか述べておらず、わたくしの才能では、これ以上うまく書くことはできなかつたのです。[手紙を書くという] この仕事は — といひますのも、わたくしにとってそれはやはり「仕事」であつたからなのです。 — 興味深くてやりがいのある作業が自分に必要であるということ、ますますはっきりと証明してくれませぬ。あなた様にお手紙を書きたいという欲求に身をまかせ、なじみのないペンを手にとつて以来、より穏やかな時間を過ごしてると感じられるようになりました。頭の中にあるのはいつもあなた様に差し上げようと思ふお手紙のことばかり、そして申し上げたいことが十分伝わればと願ひながらも、おしゃべりが過ぎるのではとも恐れ、このようなことをして如何なる印象を抱かれるのかと不安になり、滑稽に思われまいかという心配と、安心して頼れるお心広い導き手を得られればという望みの間を行ったり来たりしながら、勇気が出たかと思ふとすぐに消え去り、変わらぬ確かなことといへば、ご高著を拝読したことで、あなた様ご自身を称え敬うようになったこの気持ちだけでありませぬ。心の中で思ひ描くあなた様はいろいろなお姿をしておられ、哲学者としてのお姿しか見えねばわたくしはおののき、書いたものすべてを破り捨て、この手で燃してしまひませぬ。優しさや思いやりあふれんばかりのご様子ならば、ふたたび自信が湧いてきて、落ち着きを取り戻し、お手紙に戻るのです。結局こうしたことすべて、精神にやりがいをあたえ活性化させてくれる作業となつて、わたくしの普段の考へや、なくしてしまへばどれほど幸せかわからない、この内なる感情を紛らしてくれたのです。

わたくしにはいかなる虚栄心もないと、もう一度申し上げます。女哲学者ぶつたり、才気をひけらかしたりしようとしてゐるのではなく、単に自分自身に抗うためにいくらかの力を手に入れようとしてゐるのです。わたくしは誰よりも弱い人間で、自分の行ひや外面を自分の力でどうにかできたことなど決してありませぬでした。心の中では荒れ

狂う情熱に引き裂かれ、理性の声を聞くことで喜びが生まれても、自分の嗜好が消えてしまうわけではなく結局すべてを諦めなければならないので、その喜びはいつでも、理性に従わなければならないという苦しみにかき消されてしまうのでした。わたくしの生きてきた人生は、言ってみれば絶え間のない断末魔、絶えず繰り返される死の苦しみでしかなかったのです。

自分の考えの裏付けをしようと力を尽くしてまいりましたが、この考えにこだわりますのも、あくまで穏やかな心境になるための手段としてのことと、はっきり申し上げることができます。もしあなた様が、より確かな結果を期待できるお考えを他にもお示しくださるならば、そのお考えも大事にさせていただきたく存じます。あなた様をお願い申し上げますことばだけが、それに従うことによって、わたくしの躊躇いを払いのけることができるでしょうし、それは嫌悪と憂鬱のみが感じられる鬱屈した暗澹たる日々のなかで、心の慰め、支えとなってくれるでしょう。

敬具

アンリエット

パリにて、1764年3月26日

もしわたくしの試みをお認めいただけるようでしたら、どのような研究がわたくしに最もふさわしいかご教授いただければ幸甚に存じます。

お返事をいただけるようでしたら、わたくしがあなた様にこの手紙を差し上げたのと同じ方法でお送りくださりませうようお願い申し上げます。

2 (3256)

ルソーからアンリエットへ

1764年5月7日

アンリエット、あなたのお手紙がどういう目的で書かれたのか、それから、お手紙がパリから発送されたことになっていますが、こうした点に関してごまかされたりはしません。あなたは、ご自分が取るべき方針についてわたしの意見を求めていらっしゃるというよりは、すでにご自分で決めてしまわれた方針についてわたしの同意を求めていらっしゃるのです。お手紙、一行読むごとに、大きな文字でこんな風にかかれていような気がいたします。「このように考え、書く人間に、もう考えないよう、そして読まないよう、厚かましくもおっしゃれるものか拝見しましょう。」

もちろん、こんな風に解釈して、あなたを非難しているではありません。あなたもご自分にとって重要な判断をしてくれる方々をお持ちでしょうが、その中に加えていただいたことに、感謝せざるをえないのです。しかし、わたしにお追従を言ってくださったからといって、よもやわたしからもあなたにお追従を言うようお求めではありませんまいし、わたしの気持ちを偽ったとしたら、これはあなたの一生の幸福に関わる問題なので、あなたが示してくださった敬意にふさわしくない対応をしてしまうことになるでしょう。

まずは無益な議論を退けることから始めましょう。今更あなたに縫い物をさせたり刺繍をさせたりしようというわけではないのです。アンリエット、帽子を脱ぐようには自分の思考法を捨て去ることはできず、幼年期に戻れないのと同じようにかつての素朴さを取り戻すことはできないのです。一度活発に働き始めた精神はつねにその状態のまま、考えることを始めた者は誰でも生涯考えつづけるのです。まさにここに思索の状態の持つ最大の不幸があり、この状態の不都合を感じれば感じるほど、それを大きくしてしまうのです。そしてそこから抜け出そうとどんなにもがいても、いっそう深みにはまってしまうことにはならないのです。

ですから、この状態を変えようなどとは言わないで、むしろあなたの置かれた状態をどのように利用できるかについて考えてみましょう。この状態は辛いもので、この先もつねにそうであるはずで、あなたの心の病は重く、手の施しようがないのです。あなたご自身もそれをご存じでしょうし、そのせいで苦しんでおられるのです。せめてこの病を耐えうるものにしようと、あなたは緩和薬を探していらっしゃる。それこそが研究と仕事の計画を立てられたときにご自身で定められた狙いだったのではないのでしょうか。

あなたがお考えになった方策は見方によっては正しいのかもしれませんが、あなたは目標からして誤っておられます。なぜなら、あなたはご自分の心の病について、その本当の原因を理解しておられないどころか、病を引き起こした原因そのものに、苦痛をやわらげる方法を求めていらっしゃるからなのです。あなたはこの病をご自分の置かれた状況のせいになさっていますが、この病はあなたご自身で作られたい物なのです。優れた天分を持った人の中にも、裕福な家庭に生まれ、その後貧窮に陥った人がおります。その中で、あなたほどにもその貧しさに耐えられず、あなた以上に不幸になったにもかかわらず、あなたがこれほど一生懸命に過酷さを訴えておられる、あの沈

鬱で残酷な目覚めを経験せずに済んだ者はどのくらいのことでしょうか。ではいったい、なぜこうなるのでしょうか。こうした人々は、それほど感じやすい魂を持っていないからだ、とおっしゃるかもしれませんがね。わたしは生まれてこのかた、その感じやすい魂というものについて、あなたほどよく話される方は見たことがありません。しかし、あなたがかくも褒めそやしておいでになる、感じやすさとは何なのでしょう。アンリエット、お知りになりたいですか？それは結局のところ、自分を他と比較しようとする自尊心なのです。わたしは病の源を言い当てたでしょう。

あなたの味わわれた惨めさはすべて、自分を誇示することに由来していましたし、今後もそうでしょう。このような方法で幸福を探してみても、幸福を見出すことは不可能です。なぜなら、他の人々の意見の中で自分が望む場所を手に入れようとしても、それはまったく不可能だからです。たとえある点で自分の望む場所が得られたとしても、それ以外のほとんどの点では拒否されるものですし、多くの賛同を得て気をよくした時でも、たったひとつでも例外があるとそれ以上に苦しむことになるものなのです。もっと酷いのは、男のようになろうとし、女性たち全員を敵にまわし、男性たちにはまったく受け入れられず、そのために、敬意を表してもらえようがもらえまいが同じように自尊心が傷つけられることが多い、というような女性です。そのような女性は、自分が望むような女性になれたためがありません。なぜなら、彼女は矛盾することらを欲しており、女性の権利を放棄するつもりもないのに男性の権利を奪い取ろうとしているわけで、このような人にはどちらの権利も十分には手に入らないからなのです。

しかし、自分をひけらかそうとする女性の最大の不幸は、周りに彼女のように振舞う人しか集まらず、逆に、決して自己顕示をせず、大勢人が集まる場所には近づこうとしない、徳高く、堅実で慎み深い人々を遠ざけてしまうという点にあります。自惚れの強い人ほど人間を誤って判断するものです。なぜなら、自分自身や自分に似ている人をもとにしてしか人間を判断することができないからで、それだとやはり人間のよい面をみることにはならないのです。どんな交際をなさっても、あなたはきっとご不満なことでしょう。あなたがなさっていた交際は、幸せになるには最もふさわしくないものだったのです。そこでは、あなたが信頼なさることができて、それによってあなたの苦しみを和らげてくれるような方には誰一人としてお会いにならなかったことでしょう。自分のことで頭がいっぱいの人たちの中で、どうしてそんな人に出会えるのでしょうか。あなた

が彼らにとって一番大事な存在になりたいと思われたところで、二番目の地位さえ与えてもらえないのです。あなたは才気で注目を集め、人に抜きん出て、愛されたいと思われました。それは矛盾しています。選ばなければなりません。平等なくして友情はありえないのですが、自惚れの強い人たちの間では平等など決して存在しないのです。心友を見つけるには、それが必要だと思うだけでは十分でなく、他人が必要とするものを与えることができなければなりません。あなたはたくさんの蓄えを準備されましたが、以上の点をお忘れになったのです。

知識を得ようとして、あなたのような歩みをたどられたのでは、知識を得る目的もその用い方も正当化されることはありません。あなたは哲学者のように見られようとされましたが、それは哲学者であることを止めることにほかなりませんでした。お追従を期待する賢者に見られようとされるよりも、結婚を待ち望む女性のように見られようとされるほうがはるかによかったです。あなたはごく表面的に体裁を整えられただけで、それでは幸福を得られるどころか、そこに見つけられたのは見かけ上の利益のみ、逆に本当の困難を抱え込まれてしまわれたのです。あなたが陥った思索する状態では、辛い思いで絶えず自分のことへと立ち戻ってしまうのですが、にもかかわらずあなたは、こうした考えを、それを生み出すことになったものと同じような仕事によって消し去ろうとされているのです。

道をお間違えになったことがお分かりでしょう。計画を立てて、進む道を変えたおつもりでも、回り道をして同じところに向かっておられるのです。研究を再び始めようとされるのは、ご自分のためではなく、やはり他人にアピールするためなのです。何年かたって変わってしまう顔かたちを補うために知識を蓄えようとしていらっしゃるのです。つまり知識の持つ力を女性の魅力に置き換えようとしていらっしゃるのです。

あなたは他の女性の追従者にはなりたくないとおっしゃりますが、ご自身では追従者に囲まれていたいとお考えなのです。友人が欲しいということは、つまり取り巻きに囲まれていたいということです。というのも、若くてもそうでなくても、女性の友人は追従者と決まっていますから。仕えるか、さもなければ去っていくか。大きなものであれ小さなものであれ、あなたはいつも集団の中心にいられるように、こうした友人を引きとめようと、遠くから手はずを整えておいでなのです。そうでもない、蓄えたいとお考えの知識は、ご自分でよかれと思っただけでたどられた計画には、まったく何の役にもたたないでしょう。他人を理解で

きるようになりたい、とあなたはおっしゃる。はたして、そのために新しく知識が必要でしょうか。実のところ、あなたが現在のご自分の知力をどの程度のものとお考えか、わたしにはわかりませんが、たとえオイディプスのような人を友に持たれたとしても、今日理解することができなとおっしゃる人々のことを、この先理解できるようになりたいと思われるかという、わたしにはそうは考えられません。すでに備わっているものを手に入れようと、どうしてそれほど苦勞されるのでしょうか。いいえ、アンリエット、そうではないのです。あなたは巫女となれば、神託を下したいと思うでしょう。本当のところは、他人に耳を傾けるというよりはむしろ、あなたの声に耳を傾けてくれる人を集めようとお考えなのです。束縛を受けないために研究するという口実で、実際には人を支配するために研究をしていらっしゃるのです。こうして、あなたを不幸にする世論の重みを軽くされるどころか、世論にいつそう束縛されてしまうのです。これでは、目覚めが今より穏やかになることなどありえません。

あなたを苛む重苦しい気持ちを少しでも和らげる唯一の方法は、今の自分から遠ざかることだとお考えです。わたしは、それとはまったく逆に、むしろ自分に近づくことだと考えています。

お手紙のいたるところにその証拠があるのですが、あなたがこれまでになさってきたことはすべて、他人に自分を実際よりもよく見せようとするだけだけを目的にしています。誰にもまして公衆に対し好評を博しながら、心の内ではほとんど満足されなかったのですから、そこにはあなたが必要とする幸福はないのだ、そして自分の計画を変える時期がきているのだ、とどうしてお考えにならなかったのでしょうか。あなたの計画は名声を得るのには向いているかもしれませんが、至福を得るには役立ちません。自分から遠ざかるうとしてはならないのです。そんなことは不可能です、いやが応にも自分に立ち戻らされるのですから。わたしに手紙をお書きになりながら、そしてご自分のことをお話になって、とても穏やかな時間を過ごされたとお認めになっていますね。そうした経験が手がかりにならないとは驚きです、またどこを探せば幸福が、というかせめて心の平安が手に入るかおわかりにならないということにも驚きます。

わたしの考えはこの点に関してあなたとまったく違いますが、何をしなければならぬかについては、ほとんど意見が一致しています。いまや研究はあなたにとってアキレウスの槍なのです。つまり、あなたを傷つけたその槍が傷

を癒すのです。あなたは苦痛を消し去ることしかお考えになっていませんが、わたしは病の原因を取り除こうとしているのです。あなたは哲学で気を紛らわせようとなさるのですが、わたしは哲学であなただけをすべてから解き放ち、ご自分を取り戻させたいと思うのです。信じていただきたいのですが、他人を必要としなくなったときしか他人に満足なさることはないでしょうし、社会が心地よいものだと感じられるのは、それがあなたに必要でなくなったときだけです。他人への要求などなくなるわけですから、その人たちへの不満もなくなるはずで、それゆえ、あなたが逆に彼らに必要になるでしょう。あなたが自分だけで生きていけるとわかってもらえれば、ご自分の美点を公共のために役立てようとするあなたは彼らに感謝されるでしょう。彼らはあなたから恩恵を受け取るだけで、自分たちが与えているとは思わなくなるでしょうし、あなたには、生きる楽しみを自分からは求めないというただそれだけのことで、その楽しみが勝手にやってくるでしょう。そのときあなたはご自分に満足され、他人に不満を持つことなどありえず、安らかな眠りと心地よい目覚めを経験されることになるでしょう。

確かに、[気を紛らせるための研究と自分を取り戻すための研究という] これほどまで相反する目的を持ってなされる研究は似つかぬものですし、精神を飾り立てる教養は心の糧となる教養とは大きく異なります。最初は実行するのがたいへんな計画でも、もし、その計画に価値があると勇気をもってお認めになるなら、方針を大きく変更しなければなりません。それには、実行にうつす前に、よくよく考える必要があるでしょう。わたしは体が不自由で、まったく時間がなく、打ちひしがれ、頭の働きは鈍っておりますし、また、慣れ親しんだごく狭い考えの枠から抜け出るには大変な努力が必要です。つまりわたしの置かれた状況は、あなたの状況とはこれ以上ないほどかけ離れています。そんなわたしが何の益もなく骨を折るとしたらおかしなことです。というのも、あなたが、ご自分の、いわば全精神の構造のようなものを、完全に作りなおそうとされるとはとても考えられないのですから。あなたはたくさんの哲学的知識を身につけておられるので、こうした計画に恐れを抱かれるでしょう。逆に簡単にその計画に取りかかることができるとしたら、あなたには何の期待もできないでしょう。ですから今のところこれ以上先に進まないでおきましょう。あなたの最も重要な問題が解決できただけで十分です。文学の道をお進みください。ほかに選択肢は残されていないのです。

この手紙は、集中できないなか、病に苦しみながら急いで書いたので、言うべきことが何も書かれていないかもしれません。また慌てて書いたために間違いを犯したかもしれませんが、それは取り返しのつかないものではありません。なによりもまず、どれ程あなたに関心を持ったか感じていただく必要があったのですが、それはこの手紙をお読みになれば信じていただけるでしょう。今日まであなたのことを、生来の性格を抑えつけ、外観から消し去ってしまおうとする、ご立派な思索家としか考えてきませんでした。つまり、外観は見事でありながら、内部は空虚な、ブロンズ彫刻の傑作のように考えていたのです。しかし、まだご自分の状態に涙することもできるわけですから、手の施しようがない、というわけではありません。わずかでも心に素質が残っている限り、絶望してはならないのです。